

原田泰治美術館を訪ねて

池田 隆

諏訪湖畔に佇む「原田泰治美術館」を訪れた。入口ドアを開けると右側に真っ赤な可愛いトヨタのスポーツカー、身体不自由な泰治が四十六年間乗り回していた愛車だとか。正面の大きなガラス窓の先には諏訪湖が広がる。対岸の山並みの上に白い顔を覗かせている頂は美ヶ原辺りだろう。二階にある常設の展示室に入る。

日本の里山や漁村の風景を彼独特の画法で描いた絵には以前から親しみを覚えていた。遠近法などの論理性を無視した絵画は直観的で楽しい。童画か千切り絵のようでその素朴さが心をほのぼのとさせてくれる。大小様々な絵をゆっくりと鑑賞し終えた。街道歩きを趣味とする私は主要道路や表通りからわざと逸れ、いわゆる名所旧跡ではない自分なりの名所旧跡に偶々出くわすのを楽しみとしてきた。彼が題材に選んだ風景もほとんどがそのような箇所である。いつそう親近感を覚える。

緻密だが単純で心和ませるこれらの絵の秘訣は何だろう。見ていて初めて気づいたのだが、彼の絵には「影 (shadow)」が描かれていない。「陰 (shade)」も殆どない。陰影を見たくなかったのか、見えなかったのか。

物理的には有り得ない光景である。陰影を描かないことが、人を恍惚とさせることに彼は気づいていたのだろう。「影を売った男」という幻想小説がある。影を無くした男が周囲から気味悪がられて嫌われる話である。しかし「影を無くした絵」は皆から慕われる。不思議なものだ。

人や事物には必ず表と裏が有る。その裏側には涼しく心地よい木影があったり、立派な陰の立役者がいたりする。しかしまた黒い雲の影が人を陰鬱な気持ちにさせたり、怖いフィクサーが影を潜めたりしている。陰険陰謀のイメージがより強い。

米国の過半数の国民は陰影をわざとつけないトランプ新大統領の単純素朴な絵に、私が原田泰治の絵を見たときのような親しみと陶醉感を抱いたのだろう。だが実世界には影もあれば陰もある。その影響を覚悟しておかねばならぬ。